



# 徒魔の手記



カティア編

宮崎文敬



賞金稼ぎのカティア（上の挿絵の女性）と出会ったのは、城に住み始めてから少し経った頃だったと思う。

僕が最初に仕事をした人で、初めて好意をもった人間の女の人だった。

きっかけは彼女の不法侵入。

夜更けに鳴り響いた、城の防犯装置の耳障りな音だった。

装置と言っても、糸に触れると鳴り物が鳴る、原始的なモノだったけど。

「珍しくドジ踏んじゃったんだよね。あの時」

今でもカティアと昔話をすると、最初の出会いがネタになる。  
今なら笑い話だ。  
でも、当時は互いにヤル気満々だった。

城に忍び込んだ彼女に対して、僕は意気込んでた。  
初めての戦いだったし、興奮と武者震いが止まらなかった。  
僕とカティアは、城の塔部分にある宝物庫で鉢合わせになった。  
生体反応が感知できる水晶玉を手にも、部屋に足を踏み入れた直後だった。



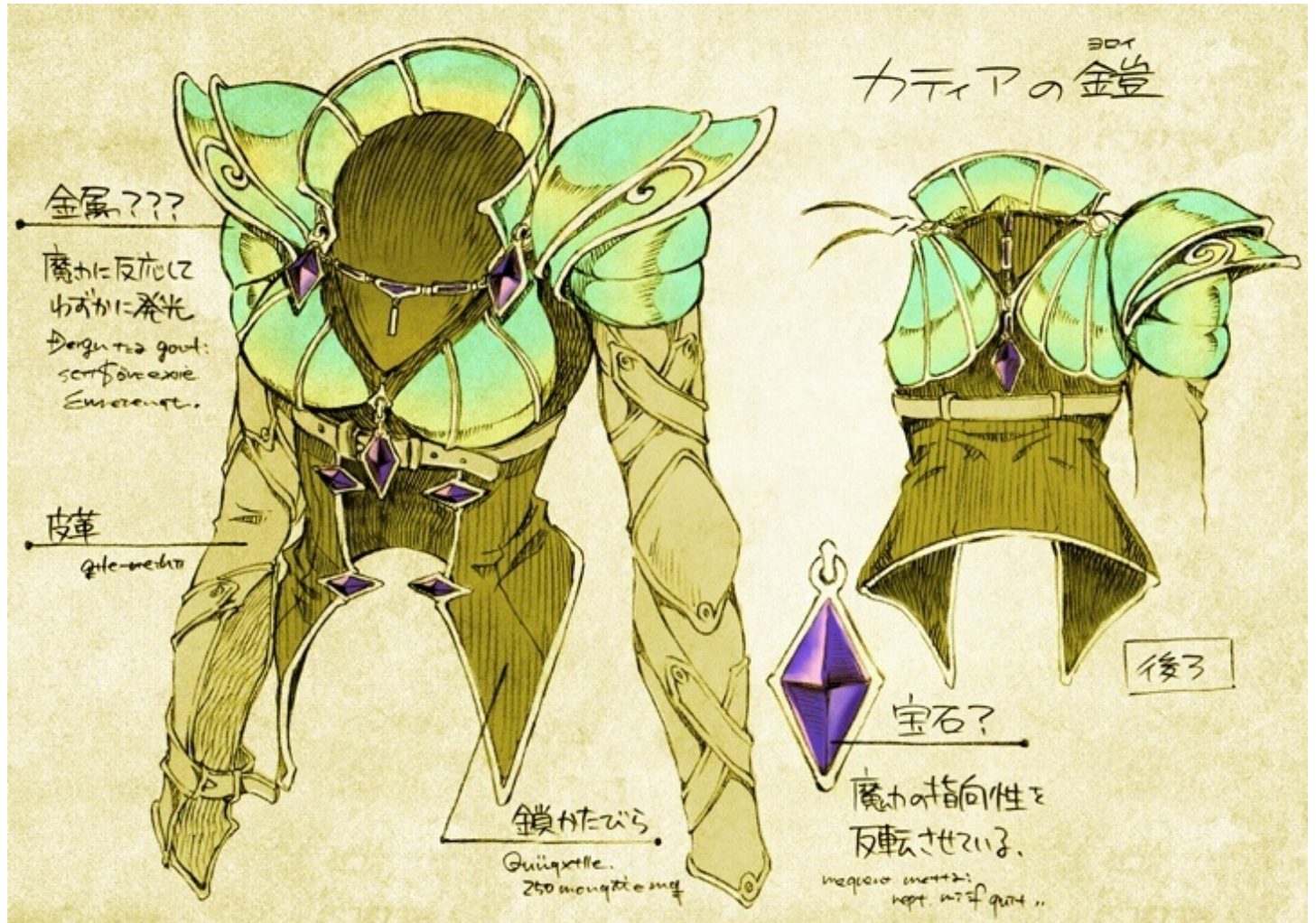
当時の肖像画（上の挿絵）を見せると、本人からこんなに怖くないと文句を言われる。

でも出会った当時は、男なのか女なのか分からなかったし、カティアも僕を倒すオーラに満ちていた。

だから当時の絵は、雰囲気として間違っていない、.....ハズである。

襲われた直後、僕は『風魔法（中）』を唱えてカティアを攻撃した。

だけど唱えた筈のつむじ風に飛ばされたのは、僕の方だった。



彼女は、魔法を跳ね返す特殊効果付きの鎧を着用していた。

素材が金属なのか、それとも既存のモンスターの体組織を加工した物なのか、当時は分からなかった。

彼女曰く、市場の骨董屋で半額セールで売られてたのを、さらに値引きさせて定価の4割で買ったとか。

その後、独自に調べて鎧の仕組みを突き止めた。

磁石を使って金属に磁力を持たせるように、『反射魔法』の効果を付属させたクリスタルを加工し、魔石を動力源にして、効果を持続させていたのだ。

どうやら魔法が万能と信じられていた古代の製法を受け継いだ代物らしい。

もっとも、こんな鎧は今じゃ商品にならない。

手間もかかるし、反射する時の角度によっては味方にも被害が及ぶからだ。

扱いにくい技術は淘汰されるのが世の常だ。

さて、魔法を跳ね返されるとは思ってもいなかった僕は、部屋の壁に叩きつけられた。  
うつ伏せから起き上がって見た彼女の顔は険しかった。  
こっちが悪者にされた気分だった。  
あのままだったら、僕は殺されていただろう。  
起死回生できたのは、師匠が遺して行った置き土産の瓶（下のスケッチ）のお陰だった。



独りぼっちで友達がいなかった師匠は、ある時、城に居ついた動物に安らぎを求めたことがある。  
宝物庫の天井に吊り下げられていた逆さまの瓶は、そんな師匠が設置した物だった。  
ところが肝心のコウモリには大不評だったようで、師匠をあざ笑うかのように窓枠で寝ていたらしい。  
人間の善意が必ずしも動物には伝わらないのは、よくあることだ。  
だけど、この一件で師匠は痛く傷ついたようで、瓶はそのまま放置された。  
僕が初めて宝物庫に入った時も、コウモリのフンは掃除されてたけど、瓶はそのままだった。  
この瓶が、僕を窮地から救ってくれたのだ。

僕は、咄嗟に『風魔法（斬）』を唱えて、瓶を吊っていた縄を素早く切った。

そのまま真下に落として、カティアにぶつければ良いと考えていたけど、瓶はスッポリ、彼女を覆い隠した。

予想外の出来事で、一瞬戸惑ったけれど、僕は続けて『火魔法（照明）』を小出しに唱えた。鎧で反射されないように、彼女の顔近辺に無数に発生させてやると、「アチヂッ！」という悲鳴が聞こえた。

しばらくすると、中の空気が燃焼で薄れてきたのか、「ゲホゲホ」という呼吸困難の咳が聞こえてきた。

そこで僕は、『眠り薬』の粉が入った袋を取り出して瓶の周囲に撒いた。

すると、粉はみるみる、瓶の中に吸い込まれていった。

これは、ちょっとした科学現象だ。

瓶の中で咳き込んでいたカティアの様子が静かになったので、僕は『移動魔法（念動）』で瓶をどかした。

彼女は、グウグウと呑気にイビキをかいて寝ていた。

顔にラクガキしてやろうかと思うくらいの無防備さだった。

今でも、あの時ラクガキしてやれば良かったと、ふと思うことがある。

カティアは、僕が作った夜食を全部平らげるほど、肝の据わった女性だった。

僕の城に忍び込んだのは、食べ物を探すのが一番の目的だったようだ。

彼女曰く、

「手ごろな武器や、お宝がったら頂戴するつもりだった」

どうやら、此处を探索の場と思っていたらしい。

よそ様の家に勝手に上り込んで物色する輩は多いけど、一言声掛けくらいはして欲しいと思う。

僕は、眠っている間に彼女の思考を、『解析魔法』で読み取った。

人の思考を視覚化すると、言葉がゴチャゴチャと混ざった状態で見えてくる。

その中で、強く意識している言葉が、大きくハッキリ浮かんで見える。

それを読み解けば、人の考えてることが大体わかる。

カティアの場合は、

『湖に棲むドラゴンを退治しに行く途中で、この城の存在を知り、空腹で立ち寄った』

ということが分かったのである。

彼女は、僕がこのことを話すと、初めは驚いた様子だった。

でも魔法だと明かすと、フーンと残念そうな顔した。

話のネタとして、タネは明かすものじゃないなと、チョッピリ反省した。

でも、屈託なく感情を見せてくれる彼女に、僕は好感を覚えた。  
そして旅の目的である、「ドラゴン退治」に協力したくなった。  
僕の申し出を彼女は喜んでくれたが、報酬をどうするかで彼女は困ってしまった。  
曰く、

「タダでは色々と貸しをつくるから……」

だそうだ。  
考えた挙句、彼女は自分の体で支払っても良いかと尋ねてきた。  
別にヘンな意味合いでなく、肉体労働とか城の掃除とか、そんな意味合いだったらしい。  
でも、その時の僕はキッパリと断った。  
理由は、師匠から強く教えられていたからだ。

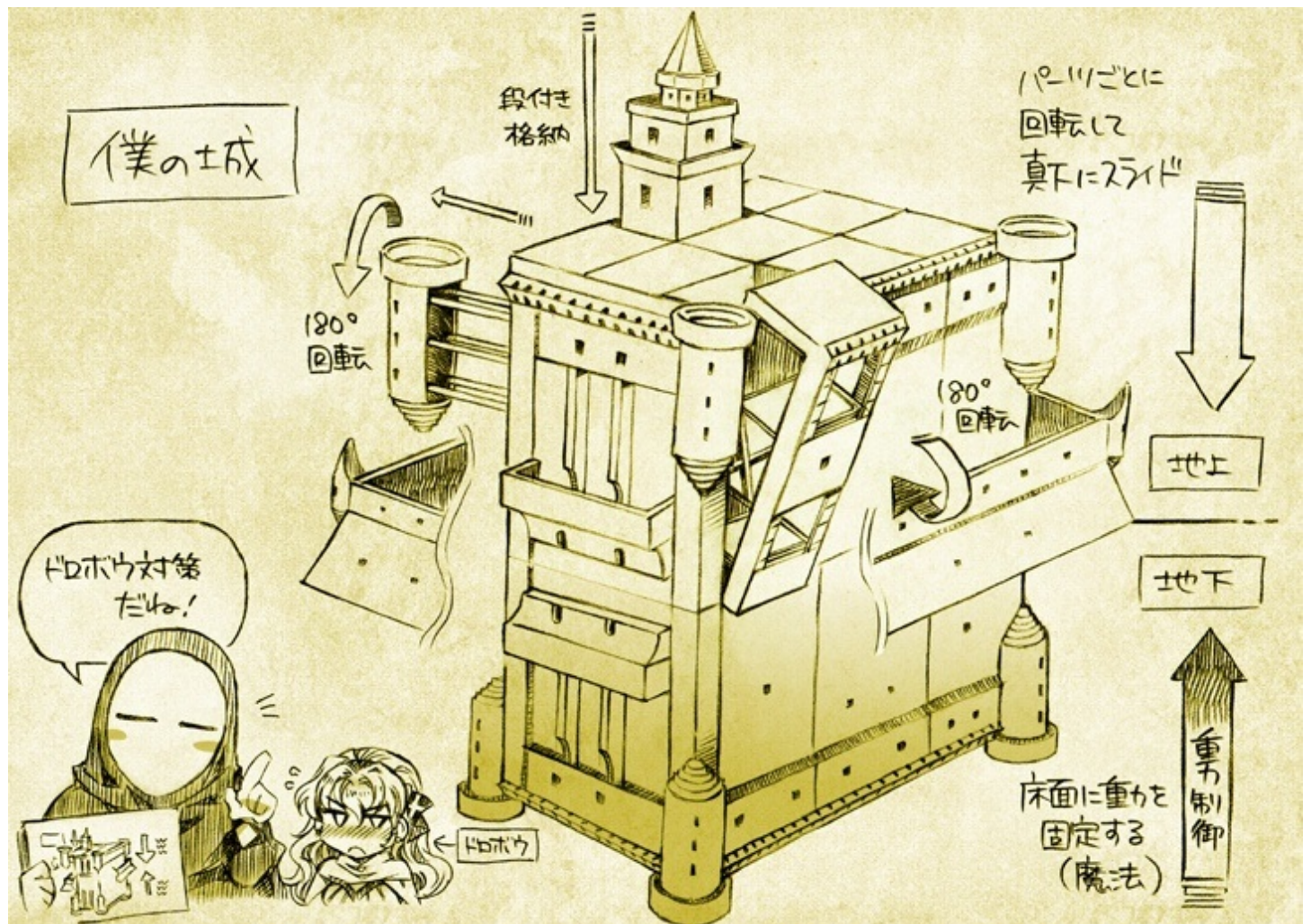
『女性が自分の体を対価にしてきたら、必ず断れ』

たぶん、師匠はヘンな意味合いで女性と苦い体験があったんだと思う。  
事実、何故ダメなのか？ という僕の質問にはお茶を濁していたから。  
僕は、カティアがドラゴン退治の前に依頼した村に寄ることを知り、報酬を山分けすることを提案した。  
彼女は了承してくれた。  
打ち解けた彼女が、おもむろに言ったことを今でもよく覚えている。

「なぜお面を被っているの？」

雰囲気流されて、僕はあっさり素顔を晒して見せた。  
僕の素顔を見て、彼女は大笑いした。  
でも、笑うなと言う方が無理だったかもしれない。  
笑い転げるカティアを見て、僕は少し腹が立った。  
遅いから寝る！ と叫んで、部屋から飛び出した。  
僕はその晩、緊張感と恥ずかしさと、屈辱感で眠れなかった。  
宝物庫の後片付けやら荷造りに追われていたら、夜はあっという間に明けてしまった。

翌日、僕は城を地下深く沈めて旅支度を完成させた。  
城を沈めるのは難しいことじゃない。  
ちょっとした機械仕掛けのカラクリだ。  
カティアに解説するために描いたスケッチ（下の挿絵）が、どこかにあったと思う。



城の仕掛けを彼女は興味深く聞いていたが、タネがわかるとつまらないと、一言つぶやいた。彼女なりの正直な感想だけど、話すんじゃなかったとその時思った。どうも僕はおしゃべりなようだ。

旅は快適そのものだった。  
なぜなら目立った外敵を一切出させなかったからだ。  
モンスターも野盗も、一切である。

「いつもなら、一定の周期で遭遇するのに、これはおかしい」

感が鋭いカティアは、僕に何か魔法を使ったかと質問してきたので、そうだと答えた。かけた者の強さを基準に、その威圧感を周囲に散布して遭遇率を減らす『戦闘回避魔法』だ。カティアの強さを基準にして唱えてみたけど、想像以上の効果だった。

「戦わないと経験が積めないし、お金が貰えないでしょ！」

カティアに怒られ、僕はゴメンと謝った。

ものすごく強いカティアのお陰で、目的の村まで僕たちは一度も襲撃者に遭遇しなかった。

大きな湖の岸边にある、小さな村（下のスケッチ図）だった。



地下に続く階段を下りていくと、広い洞窟に大勢の村人たち（下のスケッチ図）が既に避難していた。



村人によると、霧には毒があるが空気より軽いらしく、地下には流れて来ないのだという。長老らしき村人の出迎えを受けたカティアと僕は、段取り打ち合わせのため別室に招かれた。打ち合わせをする彼らの話をまとめると、こんな感じだ。

- 1、数か月前から、湖に毒の霧を吐くドラゴンが現れて、村人たちが漁が出来ず困っている。
- 2、村人の一人がカティアと知り合いだったので、ドラゴン退治を彼女に依頼した。
- 3、ドラゴンには生活習慣があって、満月の晩になると水面に浮き上がり、一晩中起きない。
- 4、それを狙って、明日の満月の晩にカティアがドラゴンを退治する。

張り切る村人やカティアを尻目に、僕の心は退治される予定のドラゴンに向けられていた。人間不信だった師匠は、常々僕に言い聞かせていた。

『物語は常に勝者がつくる。伝説や武勇伝の悪は、ただの敗者にすぎないのだ』

退治される予定のドラゴンが、人間を苦しめる愉快犯とは思えなかった。狡猾なドラゴンもこの世界にはいる。

だけど、奴らはもっと慎重だ。

自分たちの所業が明るみになるような不手際は、めったに起こさない。

それに今回、ドラゴンの種類が特定できないというのが気になった。

この世のドラゴンは、ほぼ全種族が特定されている。

新種なんて、この数百年みつかっていない。

だから僕は真実を突き止めたかった。

頃合いを見計らい、僕は『転送魔法（離脱）』を唱えて地上に出た。

地上はまだ、霧が深く村を覆っていた。

普通の人間なら、毒で状態異常が発生するところだろう。

僕は特異体質だった。

昔、師匠の手伝いをしていて、誤って薬液を煮出していた大釜に落っこちたことがある。

幸い、煮立つ前の温泉並み温度だったから、僕は素早く助け出されて無事だったのだが.....。

後日、師匠の分析で僕の体質は大きく変わっていた。

- 1、毒やマヒなどの状態異常と、石化や暴走、獣化といった状態変化が全く発生しない。
- 2、自分や他者からの魔法による回復や蘇生、機能向上が受けられない。
- 3、魔法で浮遊や空中移動、高速の移動ができない。
- 4、体が仮死に近い状態であり、呪術死や宣告死などの即死系魔法が効かない。
- 5、魔法による自身の転送や、反射効果の付属は辛うじて行える。

このような体質を、僕は一生背負うことになってしまった。

僕は、毒の霧の中でも普通に歩ける。

だけど自慢できることじゃない。

他人から見れば、僕は化け物と呼ぶにふさわしいだろう。

だから僕は尚更、化け物や怪物たちに肩入れしがちになる。

湖畔に立つと、僕は『氷結魔法（強）』を唱えて、氷の橋を作った。

浮くことはできないから、橋を作ったのだ。

万が一を想定して、それなりの対処ができる小道具も携帯した。

なぜか僕の体質は、薬草などの道具系は普通に効いた。

たぶん、直接反応させる物は体が受け付けるのではというのが、師匠の推測だ。

どこかの偉い医学の権威が、僕の体を病理解剖すれば医学に革命が起きるかもしれない。

絶対断るけど。

湖のほぼ真ん中まで来た時、急に湖面が大きく波立った。

ギシギシと、氷の橋が音を立てて軋んだ。

水中を見つめると、なにか大きな生き物が、もの凄い速さで浮き上がってくるのが見えた。

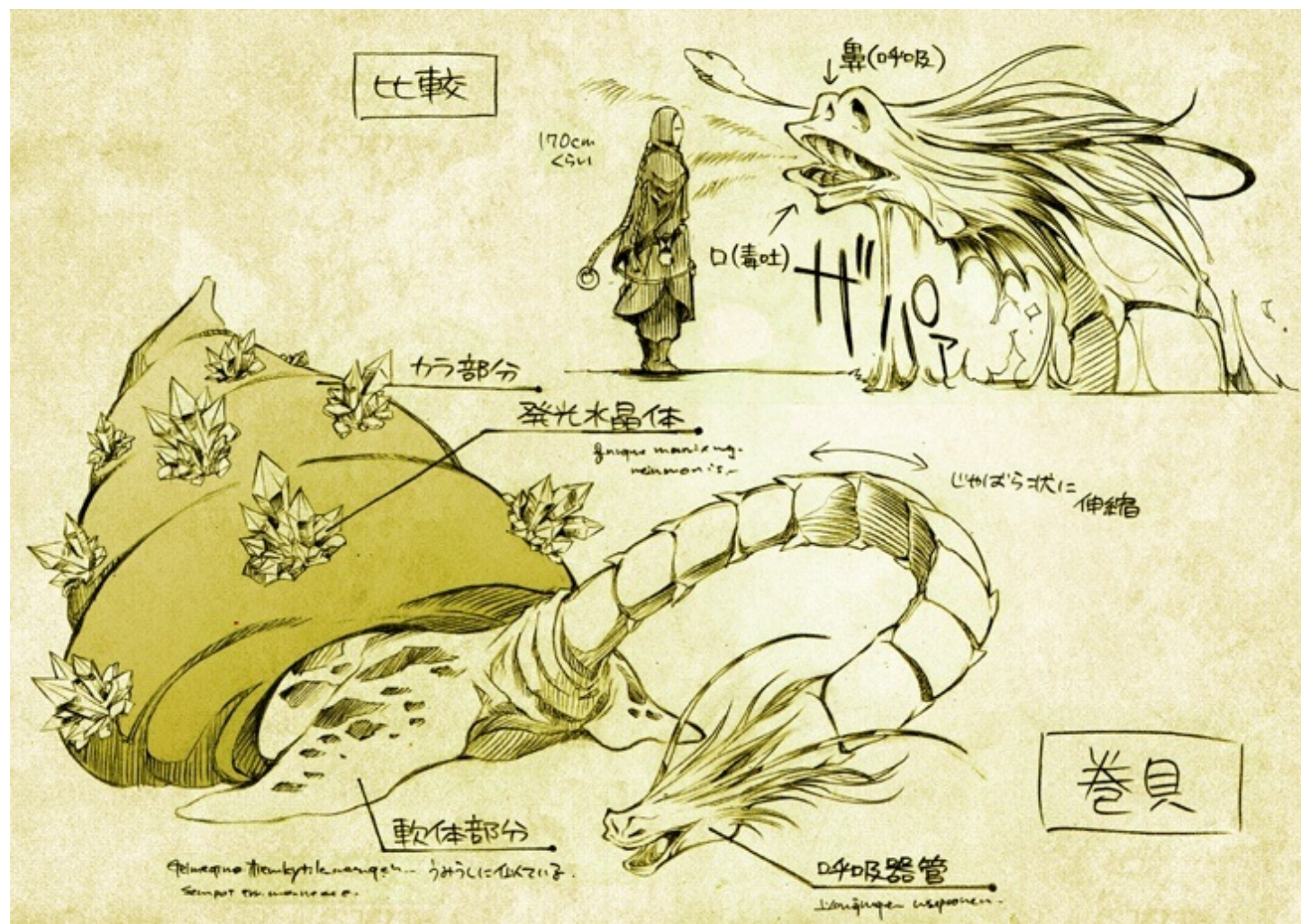
僕は『転送魔法（離脱）』を唱えて、湖畔に戻った。

戻った直後、生き物は勢いよく浮上して、氷の橋をコナゴナに砕いてしまった。

浮上した生き物を一目見て、僕は正体がわかった。

ドラゴンじゃない。

淡水の湖を渡りながら生息している水陸両生の巻貝『竜巻貝』（下のスケッチ図）だった。



この巨大貝は、えら呼吸と肺呼吸を使い分ける。

肺呼吸の際には、長い首のような呼吸器官が、まるでドラゴンの首のように間違えられる。

実際、遠目から見れば殻を背負ったドラゴンに見えないこともない。

この巻貝は、外敵から身を守るために、よく毒の霧を事前に周囲に散布する。

基本、臆病な生き物だから先手を打つというわけだ。

竜巻貝は僕のいる湖畔まで泳いできて、挨拶がてら毒息を吐きかけてきた。

見た目は紫色で毒々しいが、意外に無味無臭だ。

少々しょっぱさを感じる程度だった。

僕が平然としていたので、貝の方が戸惑っていた。

僕は、貝と交信を試みた。

発光の明滅を信号パターンにして、仲間との意思疎通を図っていると、辞典に書いていたか

らだ。

『雷魔法（照明）』を、手のひらで明滅させると、竜巻貝も殻の発光器官を点滅させて応じてきた。

パターンは思ったより単純で、数十回目辺りで、貝の思考が分かるようになった。

対話を重ねると、貝の言い分は以下の通りである。

『湖で出産したい。でも人間たちが毎日魚を獲ってうるさい。気が散って出産できないから毒撒いてる』

人間にも生活のためという事情がある。

でも、その辺りは理解しないだろうと思って、説明しなかった。

出産に費やす期間は約一週間。

つまり一週間は静寂な空間を作らなければいけない。

しかも出産には、月光浴によって得られる満月の光が不可欠らしいのだ。

村人が言っていた満月と巻貝の関係がここで結びついた。

だがしかし、一週間も待ってたら人間が生活できなくなる。

打開策を考えた時、ふと城の近くの森に沼地があることを思い出した。

貝に訊けば、出産に必要なのは適度な水と静寂であり、水の深さは関係ないらしい。

僕は貝を説得して、城近くの沼地へ一緒に『転送魔法（指定）』で跳んでみた。

城近くの沼地を、竜巻貝は気に入ってくれた。

近くには人家はおろか、モンスターも出没しないので、安心して出産できるからだ。

僕は、問題を解決したと思って安堵した。

そして、退治するドラゴンがいなくなったと報告するため、村に戻った。

村は、霧も晴れて平穏をとりもどしていた。

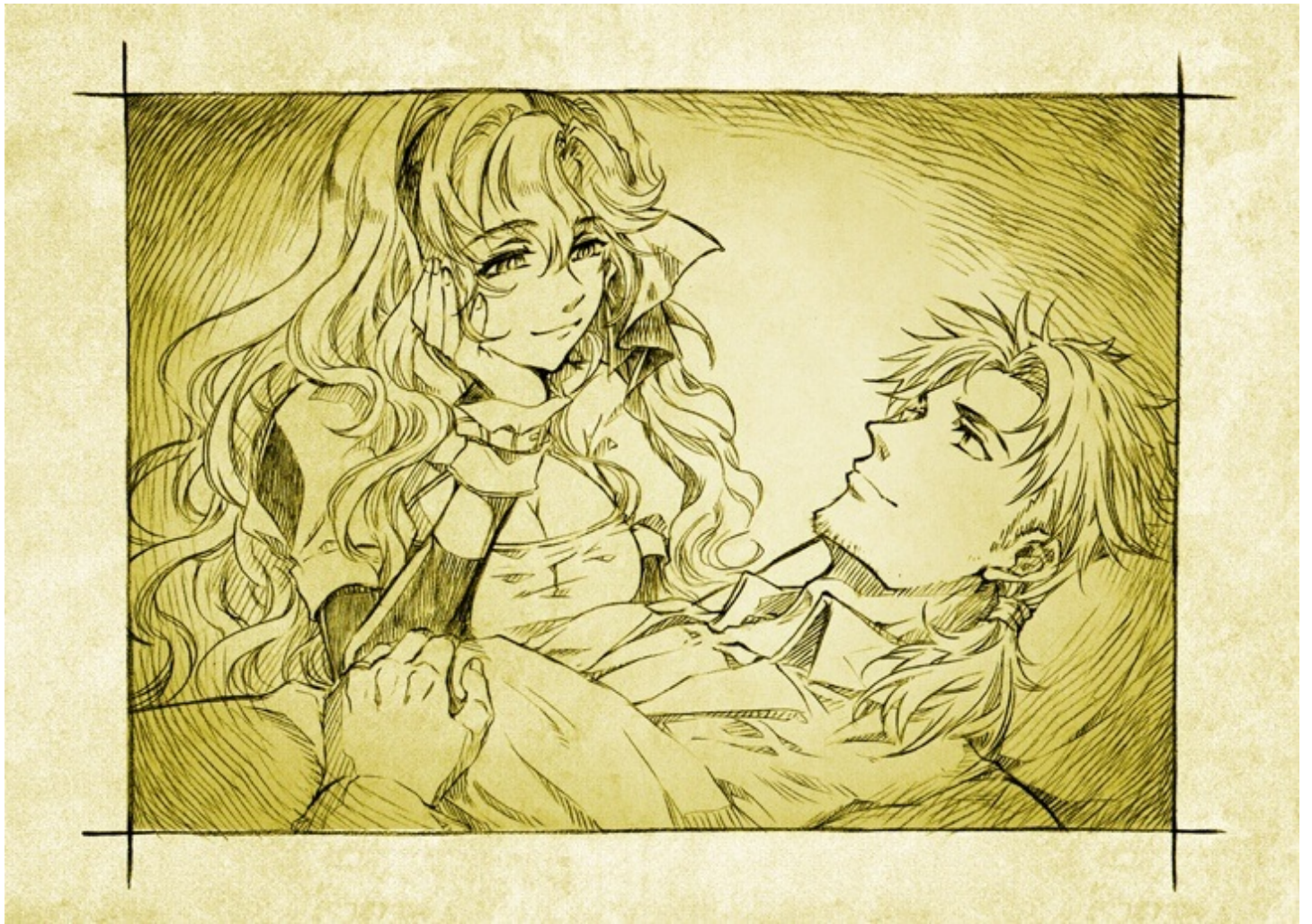
近々ドラゴンが倒されるからか、村人たちの顔色も明るかった。

僕を地下に避難誘導してくれた村人を見かけたので、カティアの居場所を尋ねた。

どうやら、地下の避難所に留まって、知人と会っているらしい。

再び地下を下りて、教えられた小部屋の前に来ると、彼女の声が聞こえてきた。

覗きこむと、彼女は知人と談笑していた。



話しかけちゃ悪いと思ったけど、その空気を読む前にベッドの男に見つかってしまった。

「君が、有名な魔法使いのお弟子さんかい？」

唐突に、師匠の話題が出てビックリした。

僕は軽く自己紹介をして、部屋の隅で2人の会話を黙って聞いていた。

まとめるとこうだ。

- ・ベッドの男は村の鍛冶屋。カティアの防具や武具の手入れを良く担当していた。
- ・彼女は最初は男のお得意様だったが、男が口説いて恋仲になった。近々結婚予定。
- ・男は湖にドラゴン（竜巻貝）が現れた初日に、地下に逃げる際に骨折し、絶対安静の状態である。

仲睦まじく談笑する2人を見て、僕は居たたまれなくなった。

同時に、取り返しのつかないことをしたのでは？ と疑念を覚えた。

カティアは男のためにドラゴン退治に躍起になっている。

退治した暁には、村を挙げての結婚式も開くという。

村人たちの様子といい、ドラゴン退治は村やカティアたちを結びつけるイベントだったのだ。

だが、ドラゴンはいない。

僕はモンスターに感情移入するあまり、人間のことが疎かになっていた。

この状況を作り出したのは僕だ。

なら、つじつま合わせも僕がやらないといけない。

僕は話があると切り出して、カティアを呼び出した。

この仕事から手を引くと告げると、彼女は困惑して落胆した。

そして何度も、「なぜ？」と尋ねてきた。

当然だ。

僕あの時、適当な言い訳を見つけられなかった。

「気が変わった」

「別に僕がいなくても……」

「ドラゴンと戦うのが怖くなった」

文字にしてみると、ダダをこねた子供みたいだ。

たぶん、カティアに甘えていたんだと思う。

好意を持った彼女が彼氏持ちだった。

そして結婚間近だった。

嫉妬してたんだと思う。

僕は、カティアや村人たちの悪口だけは言わなかった。

嘘でも、それだけは言っちゃいけないからだ。

最後は逃げるように、『転送魔法（指定）』で城に戻った。

これでカティアの物語の中で、僕は臆病者で終わるだろうと思った。

さて、城の近くの森にある沼地を再び訪れて見ると、竜巻貝は早くも卵を産んでいた。

卵のふ化には満月の光が不可欠らしい。

出産の邪魔して申し訳なかったが、事情を説明して、『召喚獣』になってもらう事と殻の一部を切り取らせてもらう事に同意してもらった。

この世界の『召喚魔法』は、召喚したい獣の了承を得て、姿や能力を実体化させるものである。

つまり、信用による契約を交わさないと発動できない。

巻貝には、こっぴどく怒られた。

後年、カティアにこのことを話したら、当然だと言われた。

城に戻ってから、僕は切り取らせてもらった殻を参考に、等身大の巻貝イミテーションを造った。

造り方は、これも後年カティアに説明するために描いた物（下のスケッチ図）があった気がする。



- 1、『氷結魔法（中）』で氷のブロックを造り、大まかな中身にする。
- 2、首の質感を再現する『擬態魔法』で、ブロックを硬質化させる。
- 3、『召喚魔法』と『幻影魔法』の重ねがけで、ドラゴンの姿を投影させて完成。

確かこんな流れだったと思う。

ドラゴン退治の当日、湖に戻った僕は、湖畔で静かに夜を待った。

やがて満月が上り、『縮小魔法』で小さくしたイミテーションを『解除魔法』で戻して湖に浮

かべた。

『転送魔法（指定）』で、僕が一度行った湖中央に転送させて、『召喚魔法』でドラゴンを創り出した。

召喚魔法は本来、短時間に発動させる魔法である。

長時間の幻影投影は従来の使い方ではなく、魔法力をとんでもなく消費してしまう。

僕は持参してきた回復ドリンクを何本も飲んで、長期戦に備えた。

やがて湖畔から、漁火を灯した小舟が何艘もやってきた。

望遠鏡で眺めると、先頭の舟にカティアが乗っているのが見えた。

カティアがイミテーションに跳びかかり、一撃を加えた瞬間（冒頭の絵画の場面）、僕は『睡眠魔法』を発動させた。

イミテーションから広範囲に発生した睡魔によって、村人たちは一斉に眠り落ちた。

僕は竜巻貝と出会った時のように、『氷結魔法（強）』で橋を作って現場に向かった。

イミテーションの上で眠っているカティアを『移動魔法（物理移動）』で船に移すと、『解除魔法』でイミテーションを氷に戻し、『移動魔法（重力移動）』で水中深く沈めた。

氷はやがて水で溶けるだろう。

忘れないうちにと『縮小魔法』で小さくした巻貝の殻の一部を、カティアの舟の傍らに置いて『解除魔法』で元の大きさに戻した。

殻は想像以上に軽く、舟が沈むことはない。

僕は『移動魔法（重力移動）』で氷の橋を水中に沈めてながら、岸に戻った。

戻った直後、朝日が湖を明るく照らした。

計算通りだった。

念のため『解除魔法』で睡眠状態を解除しようかと思ったが、杞憂だった。

みんな日の光に目覚めたからだ。

村人たちは困惑しただろうが、やがてカティアの傍ら殻の一部を発見したのだろう。

歓声が沸きあがるのが遠くからでも聞こえた。

意気揚々と引き揚げる村人たちを見て、僕も帰ろうとした。

『転送魔法（指定）』を唱えようとして、僕は自分の計算違いに気付いた。

魔法力がゼロになっていたのだ。

持参してきた回復ドリンクは使い果たしていた。

僕は徒歩で、城まで帰るハメになった。

城に帰ってから、僕は足の筋肉痛とドリンクの飲み過ぎによる腹痛に苦しめられた。

数週間ウンウン唸った結果、僕はこれら出来事を嫌な思い出として、忘れることにした。

カティアがやって来たのは、筋肉痛と腹痛が完全に治った1ヵ月後だった。

「約束の報酬」

と言われて、目の前に置かれた金貨の袋に、しばらく戸惑った。

「わたしはあの時、眠らなかった」

と言われて初めて思い出した。

彼女の鎧は魔法を跳ね返す仕様だったのだ。

それをすっかり忘れていた。

カティアは、僕の離脱が腑に落ちなかったらしい。

あの晩、ドラゴンに一当てして一発で偽物と見ぬいた。

直後の村人たちの不自然な眠りに僕との勝負を思い出し、眠ったふりをした。

僕が再び現れて小細工するのを薄目で見守りながら、ドラゴンの不在を悟ったという。

茶番につきあい、村の祝福を受けて報酬をもらい、鍛冶屋の男と結婚した。

だが真相が知りたくなって、僕の城を再訪問したというわけだ。

僕はカティアを、森の沼地に案内した。

沼では、卵から孵った竜巻貝の子供たちが母貝と仲良く戯れていた。

巻貝たちはカティアに驚いた様子だったので、僕が交信して安心させた。

僕の通訳で、彼女と巻貝たちは互いの事情を知り、仲良くなった。



.....カティアの悪食ぶりには恐れ入ったけど。

城に戻ってカティアにお昼ご飯を食べさせていると、彼女に質問された。

なぜ、全てを打ち明けなかったのか？ と。

師匠の言葉を引用し、英雄譚の善悪論を話し、退治される者を見過ごせなかったと切り出した

。

そして、自分の考えを彼女や村人たちに押し付けたくなかったと続けた。

彼女から、臆病者と呼ばれて平気なのかと訊ねられたので、大した問題じゃないと強がった。

誰だって、他人から嫌われるより好かれた方が良いに決まってる。

でも、他人の善意や感謝を期待するようになると、依存して目先の行動しかなくなる。

僕はそういうのが大嫌いだ。

カティアはあの後、鍛冶屋の男と別の町に移り住み、そこで武道の先生をしているらしい。  
ドラゴン退治の舞台となった村は、平穏を取り戻して殻の一部を『竜の鱗』として飾っているとか。

ドラゴン退治の真相は、僕とカティア、そして彼女の家族のみが知ることである。  
物語はこれで幕を閉じる。

ここからは後日談だ。

僕は年に数回、カティアの家にお呼ばれされることがある。  
記念日とか祝い事とか、そんな日に彼女の家族と食事をする。

カティアは今や、3人の子持ちだ。

僕もそこそこ、名前の通った魔法使いになった。

カティアの家で談笑していると、彼女の子供達から弟子にしてくれとせがまれる。

僕はやんわり断る。

食い下がられると、仮面を外して素顔を見せて爆笑の渦を巻き起こし、お茶を濁す。

そして最後に、こう言い聞かせる。

「魔法は相手の幸せのために使う。人を幸せには出来ないけれど、幸せの助けにはなる。君たちが誰かの幸せを願える、優しくて強い心の持ち主になったら、考えよう」

カティアの子供達が言葉通りに育ったら、僕は一応、約束を守るつもりでいる。

でも実現しないだろう。

言葉通りに育ったら、魔法の力に頼るようなことはしないだろうから。

僕はカティアの家には泊まらず、いつも日帰りで帰る。

幸せの温かみが、僕には苦しいからだ。

城に帰って自分の仮面を外すと、やっと落ち着く。

でも、不意にさっきまで居た暖かさが、じんわりと恋しくなる。

そんな時、僕は熱いお風呂に入って、さっさと寝る。

幸せなんて、僕には思い出の残り香でしかないからだ。

カティア編 おわり

徒魔の手記 カティア編

<http://p.booklog.jp/book/83102>

著者：宮崎文敬

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/batigainahito/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83102>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83102>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ